The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『しのびね物語』の引歌
Author(s)	中村, 友美
Citation	詞林. 1999, 25, p. 58-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『しのびね物語』の引歌

中村　友美

はじめに

『しのびね物語』には、作中人物の詠じた和歌が計一九首みられる。これは、いわゆる中世王朝物語の中にあって、決して多い数字とはいえないものの、従来、成立や改作などの問題と関わって、度々論じられてきた。古本『しのびね物語』を知る手がかりが『風葉和歌集』所収の三首の和歌のみであることから、古本と現存本との距離をはかるために和歌が注目されるのは当然のことである。[1] しかし、改作時期や改作者像を明らかにしていく上では、作者と読者との共通の知識を基盤として成り立ち、より時代性を反映している引歌をも作中和歌とともに考慮するべきではないだろうか。

本稿では、『しのびね物語』の引歌表現の検討を通して、各系統伝本の特徴を明らかにし、ひいては登場人物や場面の物語世界内での位置づけを考察していくこととしたい。

一　諸本における引歌

『しのびね物語』の現存諸本は、桑原博史氏により三系統に分類されている。成立順序としては第一系統から第二系統へ、そして第二系統から独自異文を多く持つ第三系統が、室町時代に派生したとされる。[2] この三系統の諸本は、引歌表現について、性格の違いがみられる。以下、引歌箇所に三系統の諸本で異同が生じている場面をとりあげる。それぞれの系統の本文は、第一系統は丹鶴叢書本[3]、第二系統は書陵部蔵本[4]、第三系統は蓬左文庫蔵列帖装本[5]によって示した。

以下にあげたのは、しのびねの姫君の出奔後、嵯峨に捜索に向かった左中弁が何の手がかりもなく帰参し、きんつねが悲しみにくれる場面である。

【丹鶴叢書本】

日暮てのちかへりまゐりて、ゆめ〳〵おもひよらぬよしを申けるに、いとゞかきくれて、ひきかづきてふし給へる、まくらよりあまるなみだは、ところせきに、みるめ

もいかゞとぞおぼゆる。　（五三頁）

【書陵部蔵本】

ひくれてのちかへりまいりて、ゆめ〳〵思ひよらぬよしを申けるに、いとゞかきくれて、ひきかづきふしたまへる、まくらよりあまるなみだは所せきに、……　（上・三五ウ）

【蓬左文庫蔵本】

左中べんは、暮てなんかへり参りて、ゆめ〳〵おもひよらぬよしを申けるに、いとゞかきくれて、ひきかづきてふし給へる、枕よりあまるなみだの所せさ、あまもつりするばかりにみえ給。　（上・三八オ）

傍線部、きんつねが涙を流すさまの描写に、三系統で異同がある

まず、丹鶴叢書本では、この箇所は傍線部の一致により、「しきたへの枕のしたに海はあれど人を見るめはおひずぞ有りける」（『古今集』恋歌二・五九五・紀友則）[6]をふまえていると考えられる。書陵部蔵本では、「みるめ」以下の語句を欠くため、この部分に引歌表現は認めにくい。一方、蓬左文庫蔵本では、この箇所に「海人も釣りするばかりに」という独自異文が入るため、紀友則の歌のかわりに、「恋をしてねをのみなけばしきたへの枕のしたにあまぞつりする」（『源氏釈』）[7]をふまえると想定する方が妥当であろう。この歌は、次にあげる『源氏物語』宿木巻の引歌として有名な歌である。

・御前駆の声のとをくなるまゝに、海人も釣すばかりになるも、われながらにくき心かなと、思ふ〳〵聞き臥し給へり。　（『源氏物語』宿木・五六頁）[8]

蓬左文庫蔵本の性格について桑原博史氏は、独自異文に古歌や古詩を引き、『源氏物語』の語句をとることなどを指摘し、「古典的用語を中心に書きあらためられた」とする。[9]この例は、まさにそういった指摘にあてはまるであろう。

しかし、蓬左文庫蔵本が一貫して「古典的用語」に忠実であったわけではない。次にあげたのは、しのびねの姫君の出奔後、きんつねは出家を考えはじめるが、若君をみてやはり決意しかねる、という場面である。

【丹鶴叢書本】

うちうなづきておはするかほの、たゞ恋しと思ふ人にたがふところなければ、あはれよしなき入山道のほだしかな、世にあるべき身にもあらぬをと、……　（六一頁）

【書陵部蔵本】

うちうなづきておはするかほの、たゞこひしとおもふ人にたがうところもなければ、あはれよしなきみちのほだしかな、世にあるべき身にもあらぬをと、……　（下・六オ）

【蓬左文庫蔵本】

うちうなづきて、「少も見ぬはこひしき物を」とらうたげにの給さまの、いとよふは、君に覚えて、あわれよしな

き道のほだしかな、世にあるべき身にもあらぬおと、……　（下・五ウ）

丹鶴叢書本の本文からは、「背きにしこの世にのこる心こそ入る山道のほだしなりけれ」（『源氏物語』若菜上・二四八頁）が引歌として認められる。この歌は他の中世王朝物語にも引かれることが多く、[10] 広く認知されていたものと考えられる。朱雀院が我が子である女三宮のことを詠んだ歌であり、きんつねが若君を「ほだし」と感じるこの場面には、ふさわしい引歌といえる。しかしながら、書陵部蔵本と蓬左文庫蔵本とは、この箇所を単に「道のほだし」としている。

丹鶴叢書本では、物語の終盤、若君が横川のきんつねのもとを訪れる場面にも、きんつねが昔を回想して語る言葉の中に、「入山道のほだし」がみられる。

【丹鶴叢書本】

「……わかれ奉りにしをりは、子ほどもつまじきものなし入山道のほだしと思ひしに、……」　（八三頁）

【書陵部蔵本】

「……わかれたてまつりしきざみには、こほどもつまじき物なしと、おゝくほだしと思ひしに、……」　（下・三四オ）

【蓬左文庫蔵本】

「……わかれ奉りしきざみには、子程もつまじき物なしながきほだしとおもひしに、……」　（下・三五オ）

この箇所についても、書陵部蔵本、蓬左文庫蔵本の本文では引歌を認定することは難しい。

第二系統で「多くほだしと思ひしに」の本文をもつのは書陵部蔵本の一本のみで、他の諸本の多くは「遠くほだしと思ひしに」とする。この本文では意味が通じにくいため、「とほく入山道のほだしとおもひしに」という本文をもつ続群書類従本もあり、この箇所に、転写の段階で、誤写あるいは誤脱がおこったものかと考えられる。第二系統には、他系統と比較しても、独自の引歌と認定できる箇所はみあたらない。引歌に対し、あまり注意を払わない本文といえよう。

蓬左文庫蔵本の本文は、確かに古歌や古詩を引く箇所が多い。[11] しかし、最も成立が古いとされる第一系統の、しかも物語において常套的に用いられた引歌を落としている。これは、元来の本文にちりばめられた引歌表現を特に意識することなく、まったく独自に古歌や古詩を取り込み、増補を行っていった結果であろう。

このような各系統伝本の引歌表現の違いは、各々異なる物語世界を生み出すと考えられる。次節からはとくに第一系統を取りあげ、その物語世界を追っていくこととしたい。

二　引歌にみる帝の位置

『しのびね物語』の作中和歌一九首のうち、きんつね、しの

びねの姫君の歌がそれぞれ八首、尼君、左大将の姫君の歌がそれぞれ一首、残る一首が帝の歌である。[12]登場の多さや、立場からすれば、帝の一首という数は少ない。

『風葉和歌集』には、「ないしのかみつれなきさまにみえ奉りければ、七日の給はせける／しのび音のみかどの御歌／けふさへやただにくらさんたなばたのあふよは雲のよそに聞きつつ」（秋上・二二〇）という歌が収められている。このような場面は現存する『しのびね物語』にはなく、古本『しのびね物語』からの改作にあたって、削られたとみられる。神野藤昭夫氏は改作について、「帝の比重が相対的に減じて、男君と女君との関係に焦点が絞られ、その結果、悲恋のために男君が決然と出家してゆく展開と女君がなお男君を愛慕するすがたを強く印象づける物語へと改作されることになった」[13]とする。帝の歌の少なさは、この結果として矛盾しない。しかし、歌を一首しか詠じないかわりに、帝は会話中に和歌の一節を口ずさんでいる。こうした箇所は登場人物の中で帝に最も多い。

たとえば、帝が典侍の局で初めてしのびねの姫君をみる場面には、次のようにある。

「いかなる人をこひ給ふらむ、かた思ひぞよ。もろごひならましかば、かばかりしづみ給はじ。おもはぬ人を思ふは、我のみくるしき」とおほせらるれば……（五七頁）

しのびねの姫君の美しさにひかれた帝は、彼女の嘆きの理由を推測し、なぐさめようとする。これは、「ゆく水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり」（『古今集』恋歌一・五二二、『伊勢物語』五十段）を引歌とする。

また、きんつねの出家遁世を聞き、しのびねの姫君との事情を知った後の場面では、以下のように続く。

「中納言こそうせにけれ。いかにかなしくおぼすらむ。されどもいづくのいはまゝでも引ぐしたらばこそあらめ、かたおもひこそよしなけれ。まろならばいかなるこけの下までも、もろともにかくれなん」とて、……（七七頁）

「いづくのいはまゝでも引ぐ」すというのは、「いかなるいはほの中にも、げに心かなはぬ世ならば、ひきぐしてこそすぐさめ」（三八頁）や「いかなる所へも引ぐして、いはほの中にももろともにすごしなばや」（六九頁）などという、「いかならむ巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ」（『古今集』雑歌下・九五二）を引歌とする、きんつねの言葉によるのであろう。このきんつねの「いはま」に対し、帝は自らの誠意を訴えている箇所では、「小式部内侍うせてのち上東門院より年ごろたまはりけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに、小式部とかきつけられて侍りけるを見てよめる／もろともにこけのしたにもくちもせでうづまれぬなを見るぞかなしき」（『金葉集』雑部下・六二〇・和泉式部）を引歌としている。

この他にも、「「こひをしこひば」と御くちずさみ給ふ御け

しき」（五八頁）では「たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやは」（『古今集』恋歌一・五一二）を引歌とし、「ことし三とせがあひだ、やすきそらなく心をみるに」（七八頁）では「あめやまぬやまのあまぐもたちゐつつやすき空なく君をしぞ思ふ」（『古今和歌六帖』第四・こひ・二〇一五）を引歌とする。

また、古歌だけではなく、かなり時代の新しい歌も引歌として用いられているとみられる。たとえば、帝が承香殿の局でいつものようにしのびねの姫君をくどいている所を、きんつねが覗きみる場面。

「こはいかに、とふにつらさのまさるとかや、ことはりぞ」とて、……（六三頁）

この「問ふにつらさのまさる」は「建長三年九月十三夜十首歌合に、山家秋風／ふくかぜもとふにつらさのまさるかなぐさめかぬる秋のやまざと」（『続古今集』雑歌中・一六八八・藤原定雅）の歌を引くのではないかと考えられる。[14]「問ふにつらさ」は、比較的早い時期に「忘れてもあるべきものをなかなかにとふにつらさをおもひいでつる」（『続詞花集』恋下・六四七・西院皇后宮）の歌が詠まれているが、「山深き正木のかつらくる人のとふにつらさの露ぞこぼるる」（『洞院摂政家百首』山家・一六三一・藤原成実）や、定雅の歌の影響を受けたとみられる「しらせばや物思ふ秋はさをしかのとふにつらさの涙まさると」（『安嘉門院四条五百首』鹿島のやしろにたてまつる百首・鹿・四五一）など、鎌倉時代に入ってから、和歌に多く詠まれるようになる。この表現は和歌にばかり多くみられるわけではなく、中世の物語においても、流行の表現であったらしい。

・とふにつらさのなみだを流されけるこそかなしけれ。（『平家物語』巻第七・一門都落・五七頁）
・御涙もこぼれぬれば、問ふにつらさもいと悲し。（『とはずがたり』巻一・二三頁）
・とふにつらさのまさるなみだは、とりあへずいつもながれ給を、……（『あさぢが露』・一〇五頁）
・心細くて泣き給ふも、「問ふにつらさのまさる」ならんかし。（『海人の刈藻』巻二・一〇九頁）
・「問ふにつらさ」と、いとど涙ぞかきくらされ給ふ。（『小夜衣』中・一二二頁）
・「とうにつらさの」と、いとゞなみだのこぼるゝを、……（『むぐらの宿』・二四二頁）

『あさぢが露』『海人の刈藻』では『しのびね物語』と同じく「問ふにつらさのまさる」とある。藤原定雅の歌は、建長三年（一二五一）九月十三夜後嵯峨院仙洞で行なわれた『影供歌合』において詠まれた。すぐに成立したとみられる『秋風和歌集』（建長三年末頃）にも入集している。定雅の歌が当時広く好まれ、『しのびね物語』でも引歌として用いられたとみてよいのではないだろうか。

さらに、帝にきんつねが恋人なのではないかとせめられたため、しのびねの姫君がこらえかね、泣きだした場面。

いよ〳〵せきかねたるを、ねんじたるさまのしるければ、「あふさかのせきもり」とくちずさみ給ひて、とかく心をとらせ給へども、露なぐさむべくもなし。（六〇頁）

「逢坂の関守」は「たまさかにゆきあふさかのせきもりはよをとほさぬぞわびしかりける」（『後拾遺集』恋二・六七六・藤原道信）などの和歌にみられる。しかし、ここでは涙をとどめがたい姫君へのなぐさめの言葉として、以下のような歌を引歌として想定する方が妥当ではないだろうか。

・ゆきあふさかによをとをさん事は、わづらはしうていそぎいで給程も、いみじうなか〳〵なり。

せきもりのとをさぬよはとしりながらなをまどはるゝあふさかの山

心からうきあふさかのせきもりはなみだのみこそとゞめざりけれ（『我身にたどる姫君』巻四・一一三頁）

『源氏物語』や『狭衣物語』など、中古の物語の歌が、中世の物語に引歌として用いられることは少なくない。『我身にたどる姫君』の歌をこの場面の引歌とみるならば、かなり時代の近接した物語をも引いていることになる。

古本『しのびね物語』は、『源氏一品経表白』『月詣和歌集』『和歌色葉』などに名前があることから、平安時代の末頃には成立していたとみられている。建長三年に詠まれた歌や、『我身にたどる姫君』の歌を引歌として認めるならば、それは、現存本のみに存在する箇所ということになる。改作によって「比重が相対的に減じ」た帝の人物像を、引歌によって浮かびあがらせるため、改作に際し、書き加えられたわけである。現存『しのびね物語』の主題が、きんつねの出家と、姫君の栄達とにあるとするならば、二人をそれぞれの道に導く役割を負う帝は、教養の高い優れた人物である必要があるはずである。引歌はこのような人物像を形成するのに、有効に機能しているといえるだろう。

帝に仕える典侍にも、引歌表現が目立つ。典侍が、しのびねの姫君の気持ちを帝に向けようとして、きんつねの心変わりを説く場面。

「……心もとなくいぶせきは、うつろふかたの深きにこそ侍らめ。……」（五六頁）

「山姫の染むるこゝろは分かねどもうつろふ方や深きなるらん」（『源氏物語』総角・四〇八頁）を引歌とする。また、そうした典侍のなぐさめにも耳を貸さない、しのびね姫君のことを、帝に奏上する場面。

内侍は「たゞ千引きの石をうごかす心ちのみしはべる」とそうし給へば、……（五六頁）

ここでは、「我が恋は千引きの石を七ばかり首に掛けむも神のまにまに」（『万葉集』巻四・七四三・大伴家持[13]）を引歌とする。

この典侍の引歌表現にしても、帝に仕える人物が、『源氏物語』の歌や、『万葉集』に典拠を持つ語を用いた会話ができることを示し、結果として、帝の人物像の形成に加担しているとみられる。

三　引歌表現の様相

もちろん、帝に関係しない場面であっても、引歌を指摘できる箇所はある。

物語の冒頭、きんつねが嵯峨を散策し、しのびねの姫君の住む庵を訪れる場面で、従者に言わせた言葉である。

ずゐじんして、「こゝに人の月にひかれてあくがれ侍る、家路もわすれて夜更はべる。御やど申さんや」といはせたまふ。（二九頁）

ここは、「このさとにたびねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて」（『古今集』春歌下・七二）を引歌とする。この時、きんつねの応対にでた、しのびねの姫君側の女房の言葉にも引歌が指摘できる。

「露もたまらぬいほりなれど、たびはさぞとおぼしゆるし給へ」とて、いとなれたるわかうど出たり。（二九頁）

これは、「吉野山みねの嵐のはげしさにささのいほりは露もたまらず」（『永久百首』秋・嵐・二七三・大進）をふまえる。前節での典侍の引歌表現と同様に、どちらも古歌を引歌として用いることで、それぞれの主の人物像を想像させる。

また、きんつねの父内大臣の陰謀で、しのびねの姫君が左中弁邸を出る場面。

もしありしにかはらぬ御心ならば、かく行へもしらずなりぬるを、いかゞおぼしなげかましと、すべて夢にゆめみるこゝちして、……（五〇頁）

ここは、「……今ゆく末は　いなづまの　光のまにも　さだめなし　たとへばひとり　ながらへて　過ぎにしばかり　すぐすとも　夢に夢みる　ここちして　ひま行く駒に　ことならじ……」（『堀河百首』述懐・一五七六・源俊頼、『千載集』雑歌下・一一六〇）を引歌とする。同様にこの歌を引く他の物語として、

・三位中将も是を御覧じて、夢にゆめ見る心地して、とかうの事もの給はず。（『平家物語』巻十・内裏女房・二〇二頁）

・たゞかた時の夢にゆめ見る心地して、たれもおぼしまどへりしさまは、たとへてもいはんかたなし、いなづまの光のまぞかし。（『我身にたどる姫君』巻一・二〇頁）

などがあげられる。

また、しのびねの姫君の出奔を知ったきんつねが、嵯峨に探索に向う左中弁に持たせた手紙には、

「あさましきことはかぎりなく夢かとのみたどられて」と、さだかならずかきて出し給へり。（五三頁）

とあって、姫君を失った悲しみを、

・「しばしは夢かとのみたどられしを、……」
（『源氏物語』桐壺・一一頁）

と、「かげろふのほのめきつればゆふぐれの夢かとのみぞ身をたどりつる」（『後撰集』恋四・八五六）を引歌とする、『源氏物語』の、桐壺帝が更衣の死後、更衣の母君にあてた見舞の言葉をふまえて表現している。

この他、きんつねの「あまの子とき、奉るとも、おろかにおもふべきにもあらず」（三六頁）という言葉、尼君の「いとこゝろのやみにさへみぐるしく侍るを」（三一頁）という言葉なども『源氏物語』の引歌表現をふまえるものであり、これらは他の中世王朝物語にも頻出する。

また、引歌表現ではないが、物語の冒頭で、姫君の住む庵のある嵯峨の秋の景色を、以下のように表現している。

……少将殿はさがのわたりのもみぢ御らんありて、小倉のすそなど心しづかにながめありき給ふほどに、……
（二七頁）

「をぐら山すその、薄まねきけりこよひはこゝに宿やからまし」（『和歌一字抄』秋野日暮・藤原時房）[16]や、「ながきよのをぐらのすそのくさのいほに夢をはかなみとふあらしかな」（『明日香井和歌集』篭菴・六五七）などの和歌、また『我身にたどる姫君』にも、「をぐら山すその、はぎの露を、もみ風まつほどをおもひをこせよ」（巻四・一〇九頁）の歌があり、これらから影響を受けたとみられる和歌的な表現である。

四　きんつねの出家場面における引歌

現存本未載の、『風葉和歌集』所収のきんつねの歌には、しのびねの姫君に対する未練が感じられ、呼称も「しのびねの中将」という在俗時のものが用いられている。こうしたことから、古本『しのびね物語』には、きんつねの出家について、現存本ほどには描かれていなかったとみられている。[17]

前節までにあげた引歌表現は、古歌を引歌とするもの、『源氏物語』など物語の引歌表現の影響をうけたもの、また、時代の新しい歌が引歌としてみられる場合、他の中世王朝物語にも常套的に引かれる歌であった。しかし、きんつねの出家に関する場面には、他の物語にあまりみられない歌が引かれている場合があり、時代的にも新しいものが多く、他の場面とはきわだった差異をみせている。

物語の終盤、若君が横川のきんつねを訪れる場面で、中宮となったしのびねの姫君の話を聞き、きんつねは胸を騒がせる。

おもひすてにし心も、うちおどろかされてむねのさわぐにぞ、うき世のつなはいまだはなれざりける。（八四頁）

「憂き世の網」という一節は「人つなぐうき世の中のつなやなに恋にまどはる心なりけり」（『拾玉集』日吉百首和歌・恋・四六八）や「朝夕に袖にかくして結ぶ手のうき世のつなをと

かざらめやは」（『拾玉集』日吉百首・二〇七七）という慈円の和歌に見いだせるのみであり、管見では慈円以外に用いられた例はみあたらない。

この他、出家時に、きんつねが母上に書き残した手紙には、次のようにあり、

「……菩提の岸にいたりなば、のちの世のやみをはるけ奉らむ身となり侍る、夢幻の世中に、つみふかきことにてあかしくらすを、かつはやくなきことなり。……」（七五頁）

また、横川を訪れた若君に対する言葉にも、次のようにある。

ち、君は中将に聞え給ふ、「此世のえいぐわにほこりて、後の世のやみわすれたまふな。いとゆめのやうなる世中に侍るぞ」とて……（八四頁）

「後の世の闇」は、早い時期の歌人では花山院に「修業せさせたまうける時粉河の観音にて御札にかかせ給うける御歌／むかしより風にしられぬ灯の光にはるる後の夜のやみ」（『新拾遺集』釈教歌・一四五一）の歌があるが、「かへりいでてのちのやみぢをてらさなん心にやどる山のはの月」（『続後撰集』釈教歌・六二一・慈鎮、『拾玉集』花月百首・月・一三八三）、「のちのよのやみをおもはぬ身なりせば暁までの月を見ましや」（『拾玉集』四八九五）など、慈円に多くみられる表現であり、また歌語として定着し、頻用されるのも慈円あたりからである。「憂き世の網」の用例が慈円のみであったことを考えると、これも慈円の歌の影響を受けたとみてよいのではないだろうか。

出家後まもない時期、しのびねの姫君が忘れられず、涙がちに過ごすきんつねの姿が描かれた場面にも、類似のことがいえる。

山ごもりの中納言は、こゝろばかりはおこなひ給へども、なほありしおもかげの、ともすればこひしくおぼしわするゝよなく、しきみつみ給ふ山路の露に、御涙あらそひて、墨染の御そでかわくよもなくしぼり給へり。（七八頁）

傍線部は、「しきみつむ山路の露にぬれにけり暁おきの墨染の袖」（『正治初度百首』山家・二〇八八・小侍従、『新古今集』雑歌中・一六六六）を引歌とする。『正治初度百首』が詠進された正治二年（一二〇〇）は、小侍従の晩年にあたり、この一首も、自らの求道生活を詠じたものであろう。仏道に入ったばかりのきんつねの姿を綴る場面の引歌としては、ふさわしいといえよう。同歌は、『とはずがたり』にも引歌として用いられている。

・榊摘むあか月起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき（『とはずがたり』巻二・七七頁）

慈円や小侍従の歌を引歌として指摘できるということは、きんつねの出家を描く物語の最末部が、改作時に付加された

ことの傍証ともなろう。また、ここにあげた引歌の例は、『源氏物語』などにみられないのは当然としても、他の中世王朝物語にもあまり指摘できない例であり、物語の他の場面でみられた引歌箇所とは性格を異にする。

極めて特徴的な引歌表現により構成されるきんつねの出家場面は、古本『しのびね物語』から改作される過程において、最も重点的に手が加えられ、現存『しのびね物語』独自の物語世界の広がりみせる部分といえるであろう。

おわりに

以上、引歌という視点から『しのびね物語』を論じた。諸本間の引歌箇所の異同には、各系統伝本の性格の違いが表れており、この物語の中心をなす、きんつねの出家としのびねの姫君の栄達とを導く人物として帝を描き出すのにも、引歌は有効に機能している。きんつねの出家を描く場面には、他の物語にみられない歌を引歌として用いており、物語の他の場面にはない特徴がみられる。

引歌の問題を考察することは、改作時期の想定だけではなく、現存『しのびね物語』の独自のありかたを明らかにする視座を与えてくれるだろう。

注

(1) 三谷栄一氏「古典の省略」(『物語文学史論』有精堂　新訂版昭和四〇年一〇月)、大槻修氏「『しのびね』物語の改作態度」(『中世王朝物語の研究』世界思想社　平成五年八月)、神野藤昭夫氏「『しのびね物語』の位相—古本『しのびね』・現存『しのびね』・『しぐれ』の軌跡—」(『散逸した物語世界と物語史』若草書房　平成一〇年二月)などが『風葉和歌集』所収の和歌をめぐって、物語の改作や成立について論じており、また、三角洋一氏「改作物語の和歌」(『物語の変貌』若草書房　平成八年二月)は、作中和歌と『平家物語』との関わりについて論じている。

(2) 桑原博史氏「しのびね物語について」(『中世物語の基礎的研究・資料と史的考察』風間書房　昭和四四年九月)。

(3) 『鎌倉時代物語集成四』(笠間書院　平成三年四月)所収本により、頁数を示した。第二系統によるとみられる傍記があるが、本行本文のみを掲出した。なお、第二節以下の物語本文の引用も同書による。

(4) 『桂宮本叢書一六』(養徳社　昭和三四年三月)所収本により、丁数を示した。

(5) 『校本しのびね物語』(和泉書院　平成元年三月)所収の翻刻により、丁数を示した。『しのびね物語』諸本の本文については、小久保崇明氏・山田裕次氏編『対校しのびね物語』(和泉書院　昭和六〇年五月)および、大槻修氏・槻の木の会編『校本しのびね物語』(和泉書院　平成元年三月)を参照した。

(6) 以下、和歌本文の引用、歌番号については特に断らない限り『新編国歌大観』(角川書店)による。

(7) 出典未詳歌。『俊頼髄脳』では初句を「恋ひわびて」とする。『源氏釈』の引用は『源氏物語大成七』所収の前田家本による。

(8) 本稿に引用した作品のテキストを一括してあげておく。

『源氏物語』(新日本古典文学大系　岩波書店)
『平家物語』(新日本古典文学大系　岩波書店)
「とはずがたり」(新日本古典文学大系　岩波書店)
『あさぢが露』(鎌倉時代物語集成一　笠間書院)
『海人の刈藻』(中世王朝物語全集一〇　笠間書院)
『苔の衣』(中世王朝物語全集七　笠間書院)
『小夜衣』(中世王朝物語全集九　笠間書院)
『むぐらの宿』(鎌倉時代物語集成五　笠間書院)
『我身にたどる姫君』(鎌倉時代物語集成七　笠間書院)

(9) 前掲注 (2) 桑原博史氏論稿。『源氏物語』の詞章の引用については、山田裕次氏「蓬左本『しのびね物語』覚え書き―『源氏物語』の詞章の引用について」(『解釈』昭和五三年九月) が論じている。

(10)「御顔の見捨て難さはまことに入る山路のほだしとぞ思さるる」(『苔の衣』秋・一八三頁)、「女みこのうへなん、いる山みちのほだしに、あぢきなくおもひみだれぬる」(『我身にたどる姫君』巻三・七〇頁) など。『源氏物語』の歌は「よのうきめ見えぬ山ちへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ」(『古今集』雑歌下・九五五・物部良名) を引歌とする。

(11)「胡角一声霜後夢　漢宮万里月前腸」(『和漢朗詠集』巻下・王昭君・七〇二・大江朝綱) を引歌とする「「かんきうばんり月の前のはらわた」とうちずんじ給て、……」(蓬左文庫蔵本上・三八オ)、「思ほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし舟の寄りしばかりに」(『伊勢物語』二六段、『新古今集』恋歌五・一三五八) を引歌とする「ありしま、にかきたへて、物も見いれたまはず、み奉るもかなしくなんとて、袖にみなともさはぎぬべきまでなきぬ。」(蓬左文庫蔵本下・九ウ) など。

(12)「人しれず恋をしぐれの初雪はなみだの雨に消やわたらむ」(六一頁)。帝がきんつねに詠みかけた歌である。

(13) 前掲注 (1) 神野藤昭夫氏論稿。

(14) 大槻修氏「中世王朝物語の特異な表現・ことば」(『中世王朝物語の研究』世界思想社　平成五年八月)、同氏「「あさぢが露」と「浅茅原の内侍」(その一)」(『あさぢが露の研究』桜楓社　昭和四九年六月)。

(15)『新編日本古典文学全集』(小学館) の本文により、歌番号は旧国歌大観番号を用いた。

(16)『日本歌学大系別七』(風間書房) 所収本による。

(17) 前掲注 (1) 大槻修氏、神野藤昭夫氏論稿など。

(なかむら・ゆみ　本学大学院博士後期課程)